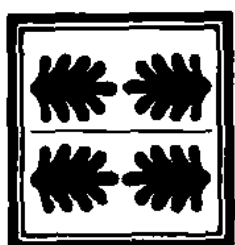


キューポラのある街 5 青い嵐

早船ちよ

講談社文庫



講談社文庫

キューポラのある街 5 青い嵐
早船ちよ

昭和52年11月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 株式会社まゆら美研

印 刷 株式会社東京印書館

製 本 株式会社大進堂

© Chiyo Hayafune 1977

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

キューポラのある街 **5** 青い嵐

早船 ちよ

大人になったあなたへ

さようなら

大人になった ジュン、ノブ子、光男……

そして、宏一、ハジメ、リスちゃん

一九七〇年代、嵐のなかを歩いていく

突っ走っていく あなたたち

ひとまず、さようなら

ころんだら ひとりで起きあがる

傷ついた膝を なめて

歩き、また歩きつづける。

寄り道したり、後もどりしたり

崖道をふみ外すようなことがあっても

この道は あなたの明日へつながるみち

若さは、たっぷり、あなたのもの

——まえがきに代えて

目次

第一部

1	あなたはキューポラの街の娘	9
2	おかえりなさい	38
3	重たい花冠	53
4	再出発のかどで	63
5	たたかいはこれから	78
6	あしたの大学	90
7	ベトコンたち	116
8	松柏学園	130
9	歌うのも遊ぶのも好き	140
10	ひとりごとを止めぬ	170
11	奇蹟のような朝	181
12	冷暖房つき	194

第二部

1	青い嵐の気圧配置……………	210
2	民族の歌と踊りの祭典……………	225
3	負けっぱなし……………	260
4	目下修業中……………	272
5	玉に賭ける……………	282
6	二十二時・二十三時・二十四時……………	312
7	デモに、いきます……………	331
8	マイカーのある生活……………	350
9	二・四沖繩統一行動デー……………	369
10	つぶれたふうせん……………	396
11	ソレ南蛮鉄でも……………	412
	解説にかえて……………	423

キューポラのある街 **5** 青い嵐

第一部



1 あなたは

キューボラの街の娘

目ざめに、ハトが啼いた。

軒端のハト小屋から、甘い含みこえで、グルグルー、グルウ……。一わが啼くと、べつのハトが、ルルウル……。ルウとこたえる。つがいどうしは、大まじめな顔で、愛のつぶやきを、あきることもなく啼きかわしているのだった。

「あそこへ行くわよ、あそこへ」

窓そと、隣家の柿若葉をゆるがして、四月終りの風が流れこむ。

ジュンは、風のそよぎに向かって胸をはり、手を上下に屈伸し、からだを前後左右へ振る。二十歳のからだは、しなやかに弾み、髪の毛が、ぱ

さつと、たたみを打ち、ぱつと勢いよく、空中にひろがる。

「かあちゃん。あそこへ行くよ」

「ジュン！ そんな乱暴をして肩が痛いったって、知らないから」

「うっふん。ずいぶん長いあいだ、手をいたわってやったもん、なんともないみたいよ」

「なんて、横着な病気だ」

「かあちゃんだって根をつめてやってると、まず、右手の親指の付根から痛んでくるよ……それから手首、そして腕へ……」

「かあちゃんは、ケンショウ炎なんてぜいたく病になれない性^なき、休んだら一文も、誰もくれないからね」

トミは、夏ものの子どもセーターに、せっせと、色糸で刺繡^{しゅう}をしているのだった。青葉のデザイン。噴水がふきあげて、QQと、おどけた水玉をちらしている。青空にのの字をかく、ひこうき雲。そこには、もうま夏がきている。

ジュンは、トミのそばへすわって、刺繡糸と針をとりあげた。てのひらへ入りそうな、小さなベビー・スモックに、青蛙^{かえる}をぬいとしてみようとして、やめた。

「だめね、あたし下手だから……かあちゃんのことをおしやかにしては、申しわけないもの」
「やってごらん」

トミは、目を細くして、赤と黄色の糸玉をころがしてよこした。

「ジュンにあげるよ、ジュンのあかちゃんに似合うようなのを、つくってごらんよ」

「おう！」

ジュンは、びっくりした声で叫んだ。

「あかちゃんなんて、考えたこと、これっぱしもないわ」

ひぎの上の毛糸玉とベビー・スモックをはらいのけて立上がった。

「いやー、かあちゃんたら！ 結婚のことだって、いっぺんも考えたことないのに。おどかさわね」

トミは、声をあげて笑った。

「それは、ねえ。女の子が、十六歳か十七歳になると、母親は……いや、いや、娘が十一、二歳にそだと、母親の気持は、そのさを待ちかねるようになるものさ。どこから、いいひとが、娘をつれにきてくれそうな、じれったいほど、待ちどおしい気がするものなのさ」

「だれが結婚するのよ、かあちゃん、おせっかいすぎるわ」

ジュンは、トミの顔をじつと見つめて、声をあげて、笑った。

「ほんとうなんだよ、ジュン。母親って誰でも、そんなふうに心待ちしてるものなんだよ」

「それ、あかちゃんのこと？」

「そうとばかりでも、ないけどね」

しかし、そうだといってもよかったのだ。トミは、目をあげて、まぶしげにジュンを見た。手も、足も、のびのびと成熟したひとりの女性としてのジュンを。

もう夏になるというのに、五十歳近いトミの夜着のえりもとに、すうすう、隙間風すきまかぜがしのびこむことがある。そんなとき、ずいぶん長くあかちゃんを抱かなかったな——と、肌さみしい。あまらずっぱい乳くさい寝息をたててねむるあかんぼうを、脇に抱いて添い寝をしたい。おしっこを

もらしたやわらかい尻を、ほとほと叩いて、「こら」というと、きやつきやつと、幼いジュンは、よく笑った。そんな肌ざわりが、飢えたように懐かしい。

「いくつだっけか？ ジュンは」

へんじはない。ジュンは、勝手元で茶のしたくをしながら、きく。

「とうちゃんは？」

「足馴らしだよ。家のまわりをぐるっとまわって、調子がよかったら」寅工場の近くまでゆつくり、ゆつくり歩いてみるべつてよ」

「ふーん、やっぱり、鑄物鉄の臭いがかがずにやおれんのね。タカユキは？」

「ゆうべ、帰ってこなかったけどね……けさ早くきて、めし食って、弁当を自分でこさえて、出たつたよ。学校へいったんだろうよ、かばん持ってたもの」

「ふふふ……」

「何を笑うことがあるのかね」

「だってさ、あはははは……」

——母は、タカユキも、わたしも独り歩きしているばかりか、夫の辰五郎まで病気が回復して足馴らしをはじめたので、母性愛の出どころがなくて、なにかわけのわからぬ欲求不満におちいつているのだろう。

「ジュンは、笑うけどな、年齢を考えな、女が二十歳になるって、たいへんなことだよ、かあちゃんだって、もう子どもがいたんだからね」

その話なら、なんとか聞かされている。生まれて二ヵ月そこそこで、肺炎で亡くした長兄のこ

とである。

「おぼえといて、かあちゃん。あたい、女が二十歳だからどうのってより、もつとだいじな問題にぶつつかつてるのよ」

「しごとのことかね？ 《守る会》かね？」

「どっちもよ、《学習》もよ。これから、工員寮へいくわ」

「おそすぎるだろうよ、いまごろになって……。なんなら、拓郎^{たくろう}さんか奥さまに、電話をかけてもらってからいったら」

「いや！」

「ちがうよ、一言^{ひとこと}通じてもらうだけで」

「そんなら、なお、いや」

「……………」

「じぶんでやってみる」

ジュンが、「はい、お茶」と、茶わんをだすと、トミは、それを手にとってさますふりをして、大きなため息をついた。

「かあちゃん」

「……………」

「ねえ、かあちゃんは、ふたりのひとをふたりとも好きだなんて、あつた？」

トミは目をむいて、茶わんをテーブルの上へ、がたんとおく。

「ねえ、かあちゃん、とうちゃんと結婚してから、ほかのひとを好きになるなんて、なかっ

た……」

トミは、息をのんだ。

「なんてことをきくんかい」

しばらく考えていて、ほうつとためいきをつく。

「いまの子って、こわいことをいう……」

「ねえ、ねえ。ほんとのこと聞かして。女どうしとしてさ」

ジュンは、トミのひざをゆすぶる。トミは、きつとなって、

「ジュン。聞くけどね、おまえ、ジョーと」

「そう、ジョーなのよ、ひとりは」

「ジュン、おまえ。もしかしたらジョーと」

「あいつを、ちよつと好きなのよ」

ジュンは笑いだす。

「ばか！ ジョーと、なんか、あつたんじゃないか」

「ははははは、はははははは」

「あいつ、ぐれてふやけてまではいないけど、まっとうじゃないよ。なまけで、根のつづかない男さ。あんなやつと、いっしょになつてみな。それこそ、かあちゃんより苦勞をするから」

「……………」

トミは、そこで、大決心の顔で切りだす。

「拓郎さん、きらいか？」

「いいえ、なぜ、そんなことをきくの？」

トミは、ジュンの目に射すくめられると、たあいもなく白状してしまい、あわてていいわけのように問いかえす。

「このあいだ、奥さまが……いえさ、何も正式の話なんかでは、まだ、なかったけどね」

「あーら、恵子夫人ならノブ子に、定時制へいく鑄物職人の娘なんかとつきあうなど、いったわ。中学生のころ……」

「だいぶ、弱っていなさるようだったよ。拓郎さんも、ノブ子さんも、気持をうちあけてくれないう。それに……それ、拓郎さんの下の息子さん——ああ、ああ、泰郎さんといったかね」

「……………」

「そのうえ、末っ子の三郎さんも、ひとりとして親のいうことをきこうとしないって」

「ふふふふ」

——親はなぜ、子どもをじぶんの思うように歩かせたがるのだろう。

ジュンは、半袖の白いブラウスに着がえ、洗い晒しのジーンパンをはく。

「そんなかつこうで、行くのか、ジュン」

「ふふふふ」

「工員寮へ行くってたろう。そんなサンダルばきなんかでさ」

「だって、かあちゃん、もう後釜がきまつてて、就職はだめだろう……ってたじゃない」

「めしを食ったか」

「ははははは」